

Revelation 啓示

神はどのようにして、ご自分の被造物に対してご自分を表されるか？答えは、一言で言うならば、「啓示」である。この一つの言葉の背後に、あるいはこの言葉を超えたところで想定されるものが多くあり、関連する事柄があり、問いに答えなければならない定義がある。

想定 (Assumptions)

私たちは生活のすべての分野において想定をしている。たとえば、メカニクにおいては、車のブレーキは必ず働くものと想定している。料理においては、買った商品の成分を確認することなしに、正しいものが使われていると想定している。人間関係においては、愛する者との間には信頼と信用があるはずと想定している。しかし、これらの想定というものは、あらゆるものをたたき壊してしまう激しい結果を生む場合もある。それゆえ、私たちは自分の想定をしっかりとチェックし、何を優先すべきかを再調整しなければならない。

信仰生活においてもまた、基本的に想定しているものがある。クリスチャンとして、私たちは基本的な想定やあるいは予想について明確にしておく必要がある。クリスチャンの信仰(バプテストの信仰者とその他のすべても含めて)を平安にするには、5つの基本的想定がある。

キリスト者が抱く基本的な想定や仮定

1)「神は」

一つ目の想定は、「神は...」と始まる聖句から始まる。聖書は一度もこのことに反論することはない。「初めに神は...」というこの偉大なる言葉を含むことこそが、すなわち、「神は...」こそが基本的な想定である。この想定は「有神論」と呼ばれるか、もしくは神を信じる信仰である。すべてのクリスチャンは、「わたしは神様を信じます」という基本的な宣言から信仰が始まるが、すべての人間がこのような想定から始まるわけではない。意図的に、そして意識的に神を信じないとする人たちは、無主教者(Atheists)たちであり、字義通り、神なし人(No-God people)である。バプテストにとって、神を信じるか信じないかは、彼らの信仰告白をする際に、また合理的な議論をするために、重要なことであった。

神の事柄について議論する公的な訓練は、「弁証学(法)」と呼ばれている。神の事柄について議論するのは良い事である。神を信じることに対して敵対する者たちをすべて説得する必要はない。議論によって信仰は強められるが、議論だけで未信者を克服させることはできない。

2)「神が語る」

二つ目の基本的想定は「神が語る」である。この仮定のポイントは、明白である。私たちの世界に

突き破ってこず、語りもしない神を礼拝するのは、人にとって良いことではない。神はどのように語り、人間社会に神ご自身を啓示されるとはどのような意味か、多くの議論がされ続けている。これから続く項の中で、私たちは神がどのようにこの世界に突き破ってこられるのかという重要な問題を取り上げる。「神は語る」ということは、私たちの基本的な想定である。「神が語る」という時は、比喩的表現をしているということをもメモしておいてほしい。神の行動は、神の言葉の一部である。

3)「神が語る」を受け取り理解する

「神が語る」という想定別の別の側面は、人が神の言うことを受け取り理解するということである。神の存在を与えられている人々がいれば、神からのメッセージを人が理解したり知ったりすることはできないと強く思っている人々もいる。この視点を「不可知論」という。「不可知論」とは「無宗教者」のようではなく、あからさまに神の存在を否定しているということでもない。神が存在しているかどうかを私たちは知ることが出来ないと言うのである。実際には、不可知論者も無宗教者も同じである。無宗教者はしばしば、神は存在していないことを証明する必要性を感じている。不可知論者は、この議論に入ることにすらしない。無宗教者たちは、神の問いについて「NO」と頭を振る。不可知論者たちは、単に肩をすくめるだけである。

4)人間には神のすべては知らされていない

四つ目のクリスチャン信仰の基本的想定は、人間には神のすべてが啓示されていないという論争があるということである。私が共有するこの視点は、神が知る、なさる、おられるということのすべてを、知り、解釈し、消化することは地球上に存在する有限なる人間たちにはできないという仮定によって成り立っている。ラテンの教えに、「*finiti non capax infiniti*」という教えがある。これは、「限りある人間には、無限なる神を完全に知る余地がない」という意味である。この考え方は、イザヤ 55 章 8～9 節の御言葉が言っていることと同じである。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、
あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。
天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、
わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

この言葉には、神と人に特別な違いがあるという理解がある。四つ目の想定についてのもう一つの考え方は、神が存在していること、神がなさること、そのすべてを人間が消化して理解できるということである。アモス 3 章 7 節にはこう書いてある。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を
示さないでは、何事もなされない。」

多くのバプテストの牧師たちは、今日、有限なる人間が無限なる神を完全に知ることが出来ると思
いこんでいる。これは、「finiti capax infiniti」(有限なる人間は無限なる神を完全に知り得る)という
視点になる。これは御言葉の証明によって確立できるような問題ではない。想定とは、ある一人の
者の神に対する見方によってなされるものであるし、限界のある人間の、あるいは限界をわきま
えない人間の見方なのである。

5) 神が表されたものは間違いなく神ご自身のことを表している

キリスト者の信仰における 5 つ目の想定は、「神がご自身を表されたことは、神が実際に誰である
かについて真実である」と想定している。私たちは、神のすべてを知ることはできない。しかし、私
たちは神によって明らかにされたことは間違いなく正しいと、そして、実際に神は誰であるかの説
明が正確であると自信を持って言うことが出来る。神の基本的な性質は、御言葉の中に表されて
おり、最大にイエス・キリストの中に表されている。神は愛であり、嫌悪ではありえない。神は、被
造物に対して関わりを持とうとされる方であり、無関心な方ではない。

これらの基本的な想定なしでは、キリスト者の信仰、そしてバプテストの信仰の表現は意味が通じ
ない。私たちが選び取ってきたこれらの想定を明確にすることで、私たちはある基本的な定義へと
進むことが出来る。

用語学 (Terminology)

新たな事柄について学ぶ時、必要なことの 70%は、用語への理解であると言われている。すべて
の訓練や神学のように、それらは独自の言葉を用いている。それゆえに、バプテスト神学にとつ
ても、意味を明確にし、はっきりさせることが重要なことなのである。「神学」という用語は、二つのギ
リシャ語テオス(神)とロゴス(言葉、研究)から成り立っている。私たちは、神学とは、神の研究で
あり、神に属するすべての事柄であると定義するだろう。神学とは、神についての公的な研究であ
るというだけではなく、すべての命(人生)を理解する方法であり、神に通じるすべての方法である。
神学とは、神に関わる考え方の土壌、私たちの神理解、私たちの存在のあらゆる分野における、
基本的な見通しである。

聖書神学とは、聖書が表現している神についての多様な洞察を細かく説明し、理解するための試
みである。歴史神学とは、神についてあらゆる時代の人々が思慮深く語ってきたことを詳しく説明
したものである。組織神学とは、いくつかのトピックの周辺について、キリスト者の考えをまとめた
ものである。具体的には、首尾一貫した包括的な神についての洞察、そして神に属するすべての
事柄などを説明したものである。倫理学と牧会神学を含む実践神学とは、私たちが生きている世
界に対するその他の神学の洞察に当てはめようとする探究である。これらの定義は、さまざまな
種類の神について言われている事柄を整理するのに役に立つ。

神について、また神に属するすべての事についての理論を私たちが知った時、私たちは日々の生活の中でその理論を実践する必要が出てくる。真理の事柄は、現実のクリスチャン生活が、キリスト教の神学よりも先にあるということである。礼拝、賛美、そして奉仕というのは、理論や、研究、そして組織形成よりも先になされるものである。

啓示的三和音

組織神学における最初のトピックは通常、啓示であり、聖書の最後の書物(黙示録)と混同されてはならない。(啓示=revelation、黙示=revelatory※語源が同じ)「啓示」という言葉は、その場面の背後にあるものを見るために、カーテンを開けるようなことである。啓示の神学的構想は、どのように神がこの世に来られたのかを説明する。啓示の書物は、善と悪、戦争の結果における葛藤というカーテンを開く。福音！神の勝利！認められた啓示の神学的アイデアは、神ご自身が自分を表すためにカーテンを開けることを意味し、しかしもっと深い疑問は、どのようにこの覆いを取り除いたのかである。神はどのようにして、すべての世代に神聖な現実を知らせ、理解させ、実施可能になさしめているのだろうか。これらの疑問は、私たちがよりさらなる定義に導く。神学は、すばらしい複雑で、織り交ぜられた現実を見る方法であり、私たちが神につかまれるように仕向けるものである。

啓示はその他の三つの神学的トピックスを含む。1) 顕現(manifestation)、2) 霊性(inspiration)、3) 照明(illumination)である。これら三つを合わせて私は「啓示的三和音」と呼んでいる。比喩は音楽から作られていることを悟るだろう。音楽的三和音は、三つの音の響きが一緒になってコードを作り出す。啓示的三和音の三つの音には、どのように神が語られるかという疑問に対する答えに従って作り出される必要がある。しかし、私たちはこれらの三つを個々に定義するプロセスによって、和音を作り出したと思う。

顕現 Manifestation

顕現が意味するところは、神が私たちの時間や場所に入ってこられ、特別な舞台で神の御意志を語り、神の特別な御業を実行されるとのことである。神は、多くのものや人を用いられ、神聖な道への気づきをお与えになる。旧約聖書においては、モーセの燃える柴、バラムのロバとの戦い、預言者たちの考えやメッセージが、神とのコミュニケーションを意味した。新約聖書においては、神は奇跡や、使徒の宣教や、旧約聖書の預言の成就を、神のメッセージの受け取るために選ばれた人たち(イスラエル人?)を祝福し、導かれるために用いられた。神の顕現は、私たちの歴史の中に表される。そして、神の意志やメッセージを受取人たちが理解できる方法で表される。

顕現における洞察は、コリント人のように文脈(環境)の中で与えられたり、ギリシャ人のように特別な言語や思考パターンの中で受け取られ、形作られたりするものである。神のメッセージが、啓

示の書物のように、抽象的だったり、記号であったとしても、神が勝利されるという主な意味については明確なのである。ヘブル語聖書の中に出てくる最初の顕現は、神がエジプトからヘブライ人の奴隷たちを解放したことである。囚われから解放されたイスラエルの周辺で働いた偉大なる力は、旧約聖書の中心的なメッセージである。この不思議な出来事は荒野での放浪、君主政治の設立、そして預言的な神の約束、裁きの警告が続いて起こる。イスラエルと神の歴史はすべて、行為においても、解釈においてもその両方において、ある明確な目的がある特別な人々たちに対する神の顕現なのである。この人々というのはイスラエル人たちであり、目的というのは、全世界に神の光を照らすことであった。

このすべての神話は、すべての人を祝福するために用いられた神の被造物である小さな共同体の人々の只中で、神はどのように働かれたかについて解釈されたものである。これらの行為と彼らの理解は、神に主導権があるということである。この画期的な物語とその歴史的、詩的な横からあたる光は(たとえば、詩篇や箴言)、その時代のすべての人々のために明確なものになる。そして、それは引き伸ばされ、すべての時代の人々、私たちの時代を含めて、神を見て理解するものになる。すべての時代に対して契約の神、贖いの神であるという解釈による旧約聖書における明確な神の顕現は、出エジプトである。新約聖書における神の顕現は、キリストの出来事である。誕生、人生、教え、奇跡、死、そして復活のイエスキリストこそが、神の顕現の行為を表している。出エジプトでイスラエルのコミュニティーは買い戻されたことが位置づけられたように、キリストの出来事は教会(神のコミュニティー)が買い戻されたことを位置づけている。教会への信仰的、実践的な使徒の宣教や手紙における教訓は、旧約聖書の預言者たちのメッセージに類似している。出エジプトと復活は、神とはどのようなものか明確にし、意味を与える神の行為なのである。神は人々を解放たらしめた唯一の存在である。神は、神の御子を通して、彼を信じる者たちに解放を与え、最後に、彼を信じるすべての者たちを神ご自身の存在の中へ贖ってくださる唯一の存在である。これは、いかなる被造物の脅威をも打ち勝つ神が、解放し、買い戻される神の顕現を表す方法なのである。これがまさに福音なのである。しかし、これははるか昔に起こった出来事のように感じられる。神は単にそんな昔に、そんなに遠くに生きて働いておられたただけなのだろうか。これらのすべてを知るためにはどうしたらよいのだろうか。私たちの神は、単に過去においてのみ神なのだろうか。これらの疑問は、啓示的三和音の次の音へと導いていく。それは「靈性」という名の音へと。

靈性 Inspiration

「靈性」(inspiration※靈感を受ける)という言葉の意味は、「息を吸い込む」である。ギリシャ語の単語である Theopneustia という意味は「神の呼吸」である。現代において(inspiration)という言葉の用いられる意味は、私たちを前向きに喜ばし、刺激するという「人を元気にするもの」(Inspiring インスパイアリング※感動する、感銘を受ける)である。私たちは明確な神学的定義が必要である。私は次のことを提案したい。「靈性 (Inspiration) は、適切な人に正しく受け取られ、記録され、釈義

され、そして、神の完全な顕現の記録を伝えるようにする神の導きである。」大変言い回しが難しいが、しかしこの定義がどれほど上で述べた顕現の考え方に合った定義であるか気づくだろう。これは「完全なるモーセ」と呼ばれるあまり面白くない話である。このお話しでは、モーセではない他の人物が、燃える柴を見て、神聖なる声を聞き、その人生をかけて異国の地へ旅立つ。霊性における考え方は、正しい人々が受け取り、理解し、神の行為とメッセージを間違いなく報告するということが前もって想定されている。(※つまり、モーセは完全ではなかったから、靈感を受けるといっても、何も完璧な人が完璧なタイミングで受け取られ、釈義されとかいうことではないと言いたいんだろうね。。。モーセが不完全な人間だったから面白い物語だったと言いたいのだろうか。)

霊を受ける課程においては、機械的なものは何一つない。「口述理論」(dictation theory)とは、恍惚状態になっている聖書記者を神が配置し、一語一語彼らに書き取らせたとされているが、長い間疑われてきた。この見方は、私たちが何千もの初期の写本の中に持っている何百という異なる読みができてしまうことを説明するものではないだろう。これは注目すべきことであり、霊性の証拠でもある。それは多くの変化(矛盾? 違い?)があるにも関わらず、すべての時代の者たちを力強め、救うことのできる理路整然とした力強いメッセージを聖書は含んでいるということである。宗教改革の時以来、聖書的権威を支持することに従った学者たちは、どのように聖書が霊的に書かれたかについてのいくつかの理論を提供している。

「言葉理論」(verbal theory※口頭理論?)は、御言葉は靈感を受けていると言う。明確であるが、もし私たちが霊的な書物として聖書を見たのなら、御言葉は霊性の媒体となるだろう。つまり言葉理論をまとめると、幾人かは、靈感を受けた完璧な言葉理論を語っていて、使われている一語一語は、まさに聖霊が意図した言葉なのだということである。何度も言うが、多くの古代の写本の目立たない違いは、どの言葉が本当にオリジナルであるかを突き止めることを不可能にするだろう。この異議を唱えるために、バプテスト派を含む現代の学者たちは、オリジナルは人間によって書かれたとする「自筆理論」(autograph theory)を提案した。これは、歴史上の作家によって書かれたオリジナルは、すべて神の靈感を受けたものであると述べている。この理論のジレンマは、誰もが認めているように、オリジナルの書かれた物が何一つないということである。証明できる証拠がないという理論を持つことは、自己壊滅的である。

霊性における理論は間違った問いへの答えのように思える。聖書はどのように霊的に書かれたかという問いへの答えを、聖書は与えてくれないのだ。聖書の内容は、神の被造物やイスラエル、教会への関わりを物語として語る説明の言葉であることが前提である。霊性は判断される。その結果によってであり、その方法によってではない。そこには数々の「神が言われた」とか「主の言葉が私に臨んで…」と指し示した言及がなされたりする。霊性における考え方について、2回新約聖書の中で用いられている。

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」(第2テモテ3:16)

「なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである。」(第二ペテロ 1:21)

これらの聖句は、明確に旧約聖書について言及しているが、しかし延長して、初期の教会や後期のバプテストがこれらを用いて新約聖書に適用させたのである。

私たちの霊性の定義は聖書的言及以上のものを含むのである。霊性について、矛盾をなくすためには、オリジナルを書いたものの背後にいて一緒に書いた者たち、またそれらを保存するために手伝った者たちにまで広げなければならない。聖書は、私たちが知っている通り、AD400年ごろまでは明確な文字には起こされていなかった。その全過程において、人間の洞察力と努力が尽力した。バプテストは、神の霊は完全なる課程を通してまた働かれるということ、認め悔い改めることになるだろう。御言葉の保存の物語はスリリングな神話である。この物語は、聖書がどのように靈感を受けたかについての仮説的な考えよりも、神がそのプロセスに関わっているというより偉大な霊性の証拠なのである。霊性に伴う結果として、聖書(文字に書かれた神の言葉)は、神の明確な顕現であるという信頼できる説明を与える。バプテストは知られ続けてきた、聖書の民(People of the book)であるということ。この呼ばれ方は、賛辞である。私たちの御言葉の理解に対する忠実さは、神の行為の連続性と聖書の中のそれらの説明を強化する。しかし、別の疑問にも答えなければならない。私たちはどのようにして自分たちの言語の聖書を手にしたのか。数多くの聖書の訳を説明するものは何か。どんな人生の段階で、御言葉の霊性は問いかけているのだろうか。

この古代の写本の翻訳における疑問は、重要である。旧約聖書はヘブル語で、新約聖書はギリシャ語でオリジナルは書かれている。旧約聖書のあるわずかな部分においてはアラム語で書かれている。聖書の翻訳の歴史は、複雑で長い話になる。私たちは、聖書を千以上の言語に翻訳することに命を捧げてきた、古代および現代の学者たちに感謝の念を負っている。1940年代以降、キリスト者は多くの翻訳を手にし選ぶことさえできた。今日私たちが利用可能な多数の翻訳は、問題かあるいは喜びかのどちらかを引き起こす。私たちが子どもたちやユース、私たち自身にさえも聖句を暗唱するように教え始めたとき、問題が生じる。私の意見としては、すべての教団で暗記のために用いる聖書と、会衆が使う聖書としてどの訳を用いるか決めるべきである。多くの翻訳を手にする喜びとは、私たちにもっと真剣に聖書研究に出席するようにチャレンジしてくるような、そして聖書のメッセージの言及方法が違うという豊かさをもたらすような、多様なテキストを見ることである。

もし仮に靈感を受けた御言葉であっても、一つの解釈だけが正しいというような保証はどこにもない。多様な聖書の理解や、解釈書が背後にあって、数多くの宗派の論争の原因となっている。私たちは多様な聖書解釈と共に生きなければならない。しかし、良い聖書理解のために基本的なルールがいくつかある。

事実、解釈についてのすべての研究において、ルールがある。それは「解釈学(hermeneutics)」と呼ばれている。いくつかの基本的な解釈の原則は、1)文脈の中で読む、2)どのような文学的背景を持った句なのかを配慮する、例えば、詩的なのか、史的なのか、書簡なのかなど。3)注解書を用いて、歴史、背景、古代聖書時代の習慣についての理解を深める。

さて、啓示的三和音のうち、二つの音について学んできた。啓示は顕現、霊性、そして照明を含む。

もし、私たちが神の古代における決定的な行い(顕現)だけしか持っていなかったら、もし私たちがこれらの説明についてのみ記録された書物(霊性)しかもっていなかったら、私たちはただの響きと過去に何が起こったのかについての言及しか持たないことになるだろう。バプテストの顕著な特徴の一つは、私たちの時代において、神との個人的で活発な関係を強く主張すること。これは啓示的三和音の最後の音である「照明」(illumination)につながる三つ目の鍵となる。

照明 Illumination

「照明」(Illumination)という字義的意味は、人が何かを見ることが出来るように光をつける(明るくする)ということである。これは、身体的とか、心理的な、霊的な光とも理解することが出来る。照明の有用な神学的定義は、救いにおける靈感を受けた記録を通して、神の理解をあらゆる年齢の人間に与える神の行為である。被造物の中に入ってこられ、救い主(キリスト)が来ることをご自身で表す神は、その神的な働きを継続される。ちょうど、聖霊によって被造物に働かれる神のように、イスラエルにもたやすために働かれた神であり、イエス・キリストを通し罪を贖われる行為を行った神である。それは、聖霊が御言葉を生きたものとならしめ、私たちの経験に介入され、神の国に入るために私たちと伴ってくださることと同じである。啓示とは歴史的である。神が私たちの時間や場所に入ってこられ、私たちをとらえ、全世界のために罪の贖いの計画に私たちを含めてくださる。あなたはひょっとすると「神は、今日の私たちには誰が神であるかご自身をあらわすことをおやめになったのではないか？」と疑問に思うかもしれない。答えは、「Yes」(神はおやめになっていない)である。しかし、神が今日なさることは、いつも、これまでになされたことのパターンとこれまで実現された神の約束とに一致している。神は新しいことを行われるスペシャリストであり、しかし、神がなさる新しい事というのは、これまでに神がなされたことと首尾一貫しているのである。

聖書を釈義する時には、私はすべての人に要求するが、御言葉を読むことによって、神の愛をはっきりと認めることが出来、イエス・キリストにおいて救いが与えられたことを悟ることが出来るのである。すべてのものが、救いにいたる事柄を十分に理解することが出来るのである。いかなる人も、いかなる団体であっても、御言葉の解釈に完全に誤りがないなどと主張することはできない。なぜなら、聖書とは、数学の教科書というよりも、ダイヤモンドのようなものだからである。太陽がダイヤモンドを照らしたときに生ずるきらめく光を、すべて捕まえるようなことは誰にもできない。これらのきらめきは、見ている者しだいで見方が変わるし、どのような加工をされた宝石かによって保たれるのである。であるがゆえに、状況、文脈、そして、個人や共同体の必要などが、時代から時代へと変わる中で、特別な気づきやガイダンスが御言葉の中にあることを見出すだろう。アナバプテストの日々から、我々は、一個人の意見よりも共同体の聖書解釈を信頼する傾向に向かった。専門的な聖書研究の日々から、我々は、これらのガイドラインを我々の聖書解釈を補強するものとして用いてきている。

照明に関する考え方は、霊的な神の啓示の記録(聖書)は、人の手の届くところに置かれているということである。照明というのは、いかなる個人や団体の聖書解釈をも最終的で誤りなき完全な

釈義であると保証するものではない。御言葉の言葉というのは、キリスト者の事実である。それは、すべての宗派や、すべてのキリスト者に所有されている。御言葉の多様な解釈は、それぞれのキリスト者共同体の遺産として形づく。すべてのキリスト者共同体、バプテストも含めて、必要なすべきこととは、彼らの受け継がれてきたものから最高の解釈を発見し、それらを御言葉の光の中で補強したり、とらえ直したり、彼ら自身(時代や環境・状況)の文脈の中にある現実を発見することである。

さて、すべての啓示のコードを見てきた。それは三つのコードである、顕現 (Manifestation)、靈性 (Inspiration)、照明 (Illumination) は、共に響きあう必要がある。この三つのコードを別々に論じることによって、私たちは神がどのようにこの世で共に働き、ご自身をこの世に満たされてきたかを見ることが出来た。もし、私たちがもし一つだけの音に極端に固執するとしたら、私たちは問題に陥る。たとえば、かつて古き日々働かれた神だけを強調したり、キリストの受肉した日々のことだけだったり、初代教会のことだけだったりを強調することである。この純粋な歴史的、考古学的観点からのアプローチは、不毛な歴史主義である。不毛な歴史主義というのは、過去に働かれた神のすべてから離れることを意味する。では、疑問が生じる。「ではどうすればいいのか。どうすれば知ることが出来るのか。今日では何か意味あることがあるのか？」

御言葉は、神のかつてなされた行為について説明している。神の行為とその意味について記録されているのである。ならしめ、集め、保つにいたらしめる多様な聖書的説明を生じさせる聖霊の導きは、注目すべき靈性(靈感を受ける)のプロセスである。靈性のゆえに、私たちはキリスト者の本(聖書)を持っているのである。しかし、聖書学的な説明を背景にした神の行為における知識なしに、神を本の中に閉じ込めることはできない。同じく、歴史(私たち自身の歴史を含む)においてムーブメント(転換、運動)を起こされた神を無視することはできない。背後に横たわっているものは何か、神がなされて以来何があるかのようなことを悟ることなしに、聖書を用いるのは、「聖書崇拜」であり、御言葉を礼拝することになる。聖書は啓示の一部である。私たちは御言葉を礼拝することはしない。聖書の背後に横たわり、そして御言葉の中にご自身を表し、ご自身を知らしめる神を、私たちは礼拝するのである。聖書は権威づけられている。なぜなら神の言葉だからである。御言葉は、贖いの意味を示すこの本を与えたもう神を指し示す。

顕現と靈性は、照明の中へと私たちを導く。照明とは私たちの受け継いできたものの中で、そして私たちの共同体や個人の経験の中で働くのである。照明は、教団や信者として、私たちが行くところにある。しかし、もし私たちが自分の経験だけを強く主張したり、「神が私に語られた」レベルに落ちるなら、私たちは「勝手きままな神秘主義」(Cut-loose mysticism)の危険性に走ることになる。勝手きままな神秘主義とは、私たちが協働(協力)すべきところを間違えていることであり、まるでキリスト者の信仰と行為が基準であるかのように、御言葉の上に個人の経験がくることである。かつてある生徒が私にこう言った。「わたしは聖書がなんと言おうと気にしません。神が私に語られるのですから。」これが、「勝手きままな神秘主義」なのだ。これは、今日のバプテストの生活の中により広く行きわたっている。ある人が、御言葉の証拠や明確な教えに対してカウンターコメント

(反論?)に走るとき、私たちは権威における問題をはらむ。顕現、霊性、そして照明は、啓示の音響コードをつくりあげるためにすべて必要とされている。この理解が、一方向だけだったり、不完全だったりするときは、私たちは「何が信仰の権威なのか？」とたずねる必要がある。この疑問のために、そして私たちのこの事象を解決するためになにを積み上げるべきであろうか？

権威 (Authority)

私たちは、日々権威についての問題に直面している。誰がこの標識をそこに置いたのか？どのCMをわたしは信じるべきなのか？多くの宗教の主張の中で、一体どれが一番正解に近いのか？ついには、私たちのすべてが懐疑論者のように「誰がそれを言ったのか？」と疑問に思うようになる。

イエスは、当時、多くの宗教リーダーたちとの対立の中で、権威についての質問に直面していた。このことで最も切れ味のある話は、ヨハネによる福音書 8 章にある。宗教リーダーたちがイエスの権威について質問してきたとき、イエスは、彼の背後におられる神と自分が同等であることを指示された。私たちはここから始めなければならない。キリスト者の信仰における権威とは、御言葉によって明らかにされた三位一体の神であり、受け継がれてきたものの中に伝えられているものであり、経験の中で現実になるものである。

すべての権威は究極的には神から来る。神は源であり、生きているものの基礎であり、生きることを許されるお方であり、天と地を創造された方である。もっと明確にするならば、それは三位一体の神、父、子、聖霊、世界を創造され、贖われた神のすべてである。私が神の三位一体について言及するのは、これこそが初代教会によって、聖書的な意味合いから描写されたキリスト者の明確な神についての理解だからである。

キリスト者の信仰における二つの明確な教義(信条)は、イエス・キリストの受肉と三位一体である。一体どれが私たちの究極的な権威なのだろうか。神である。神とはどれか(誰か)？天と地を創造された神そして私たちの主である父、そして、救い主であるキリストなのだろうか？そのように、御言葉は語り、共同体の最初の信仰告白であった。しかし、私たちはどのように神を知るのだろうか？神はどのようにご自身を表されるのだろうか？

神は決定的に聖書の中にご自分を表しておられる。しかし、私たちはどのように聖書を解釈するだろうか？「地には正しい人はだれ一人いなかった」私たちは全員、キリスト者が受け継いできた遺産がある。私が受け継いだものは、他のキリスト教の伝統のお蔭で成り立ち、豊かにされたバプテストの遺産である。何度もバプテストは、神から、あるいは聖書からさえもまっすぐに、個々の独自の経験に飛ぼう(Jump)と欲してきた。それは機能しないだろう。私たちのすべては必然的に、時代によって、また私たちの生活環境によって形づけられる。私たちは受け継いできたものがあり、文脈がある。たとえ、バプテストの話を何一つ知らなかったとしても、私たちの家の教会やわたしたち自身の家族に何が起こったかは知っている。私たちはバプテストの伝統について、この現代においてバプテストとは誰なのかが形づけられていることのために、学ぶ必要がある。

私たちの権威についての教義の最後の部分は、私たちの教会生活や個人的な生活での経験に及ぶ。私はバプテストが大きな尊敬と豊かな慰めをもって、一人の者が所属している罪救われた共同体である、教会にきくことを励ましたい。教会に参加する生き方とは、神が個人に何を語られたかではなく、教会(共同体)に何を語られたかにもっと調和する生き方である。これは常にケースではなく、絶え間ない教会への反論の連続の中で見出す者たちは、慎重に彼ら自身を評価することを欲するだろう。

もし、これらの権威の要素を三位一体の神、御言葉、遺産、そして経験に置くならば、常軌を逸脱して、私たちは神学的な混乱の危険に陥る。数年前、大勢の牧師に語ったことがある。私たちは聖書を神の位置に置き、私たちの経験がすべてのもことの上に置かれる危険を冒していると示唆したことがある。そのあとすぐに、私が言ったことが理解できないと言った有名な牧師から一通の手紙を受け取った。彼は、「聖書は神である。そして、神は聖書である。」と続けた。これは典型的な聖書主義者の事例である。すべての事柄の中で、神は卓越しものをお持ちである。今日のバプテストで生活する者の幾人かは、個々人が経験することがらをまるで最高の権威に位置付けたいと願うものもあるかもしれない。しかし、私たちの経験はあやふやなものであるし、私たちの最終的な権威にするには多様すぎる。私たちは神の最初で最後の場所から離れよう。私たちの権威は、カブクのファッションの中に認められるものではない。良く知られている讚美歌に、「わたしの信仰は、いこいの場で見出される」というものがあり、最後の権威の現れである神の贖罪の愛や行いを受け入れるという証しをしている。二つの質問が必ず生じる。他に啓示の源となるようなものがあるのだろうか。他の宗派が正統であるというを主張しているのか。

その他の啓示の源

神は、本のページの中に、それも聖書のページの中にさえも閉じ込められる存在なのだろうか？まったく違う。神は神、すべての主と断言している段落を再度読まなければならない。その他に私たちが神の痕跡を見ることのできる場所はあるだろうか？見回してみよう。神が創造された世界、その世界を人間は破壊しているが、そこに創造主の顕現を抱いている。私たちが神の威厳、尊厳を引き寄せることのできる知識は、「普遍的(通常)関係」と呼ばれる。「普遍的(通常)関係」は時々、「特別(特殊な)関係」と対比される。この普遍的関係の聖書的根拠は、ローマ書 1 章に見出される。それは、すべての者は神が創造された世界の中に神の存在、創造主を見ることが出来るはずだと語る。しかし、それは神が存在しているという一般的な考えだけである。神がどのような存在であるかということについては何も語っていない。「普遍的関係」の考え方はしばしば、何が正しく間違っているかのセンスを与える、すべての人が生まれつき備わっている良心と対になっていることがある。普遍的関係と良心は、神の前にすべての人間は罪びとであると判断される。

この普遍的関係の古い視点に対して、近年では多くの批判のもとにさらされている。現代の都会的な人々は、自然に直接触れる機会はずかしくない。私たちの世界にいる子どもたちや若

い人たちは、極悪な犯罪や、善悪を判断する認識力のないデモンストレーティングに関わっている。私たちの時代は、不道德な時代であると言われ続けてきた。私は偉大なる神の世界と(私たちの社会の中にある除去できないクリスチャン文化から来る)この世のモラルとを啓示に備えるために、分けて考えたい。すべての人が知り、識別できるように私が「発見」とラベルを貼る。私は、神が愛する救い主、生涯の全盛期、死、埋葬、そしてイエス・キリストの復活というご自身のベールを取り去るこれらの特別な行為に、啓示という用語を与えたい。

古き教会の伝統と人間の自然的な楽観視点は、人間的理由で神の存在を論理的に証明の発見ができ、論証できると示唆している。この考え方は、トマス・アキナス(1224~1274)やインマヌエル・カント(1724~1804)によって支持されている。これを「自然神学」(Natural Theology)と呼ぶ。自然神学は、私たちの生まれつきの性質によって、私たちが作り上げることのできる必然的な崇高なる力の存在自然的で合理的な力を示唆している。自然神学は、信仰の土台を提供して、信じる者たちの助けとなる。現代の力強い説得力のある哲学者たちは、古き哲学者たちの神は存在しているという「証明」を弱体化させている。自然神学は、普通の(平均的)キリスト者(The average Christian)をほんのわずかな実践的な助けとなる高度な詭弁(or 洗練された? = Sophisticated)の訳が肯定的なのか、否定的なのか、??)のシステムである。自然神学を、「自然の神学」と混乱してはいけない。自然の神学とは、神の世界についてのキリスト者の会話(論文? = Discourse)である。自然の神学は、神の創造における感謝や驚き、そして神の世界を大切にするという決意が含まれている。キリスト者は、すべてのエコロジーの本質について関心を示すべきである。「私たちの父なる神の世界」であり、神は私たちにこれらを管理するように願われている。

私にとって、啓示とは、常に特別なものである。私たちはみな、創造主についての通告を私たちの周りにある世界から引き寄せる。私たちは、この世によって外見や、モラルなどを形づけられる。そこには最上位の存在についての視点を補強する論理的な議論がある。これらの発見は、啓示の入り口へと導くものである。疑問は残る。他の宗教も同じように啓示を受け取っているのだろうか？

宗教的多元論 (Religious Pluralism)

20世紀のアメリカでは、多くのバプテストは、私たちの想定を持たず、私たちと同じような啓示への視点をシェアしない人々に会い続けてきた。これは、現代の信者たちにとって二重の挑戦である。私たちは自分たちの信仰について理解する必要があるし、説明できるようになる必要がある。そして、私たちはまた他の信仰居ついて理解し、対話する必要がある。私たちのほとんどは、仏教徒やムスリムの人たちが、良い人々であり、モラル的であり、正直な信仰者たちであることを知っている。キリスト教の神学は、他の宗教の多元論についてどのように言っているだろうか？

適切な態度 (Proper attitude)

他の宗教について考える基本的な態度が、4 つある。一つ目は、保守的な態度であり「彼らはすべて悪」(They-are-all-of-the-evil)と考える。この態度の理由は、私の信仰こそが正しい、なぜならこれは神からきているからだと考えているからだ。私の信仰と違っているから、彼らは悪魔に違いないと考える。これでは、情報を受け入れることのできない立場になる。こうなるともちろん、他の宗教の人々と対話することを許す視点にはならない。初期のバプテストは、違うキリスト教の宗派に対してさえも、この「彼らはすべて悪」という視点を持っていた。多くの敵意と、批判、そして不幸(悪)が生じるだろう。苦い実を避けるこの最初の視点によって、少しは得るものがある。

二つ目の世界にある宗教を見る見方についての態度とは、「階段を上る」(Stair-step)アプローチと私は呼んでいる。このアプローチは、一つのビルにある階段を例にした基準に従って、世界の宗教をランク付けする態度である。かわいそうな、原理主義的な宗教と呼ばれる彼らは、往々にしてこれらの比較的な議論に答えるにはあまりにも準備が整っておらず、通常は階段の底に巻きついています。最上階に達する人とは、階段を作った人間であり、この比較のルールを作る人間である。この比較する態度は、通常傲慢さを表し、異教徒の人たちとの対話に開かれない。

三つ目の他の宗教を見る見方についての態度とは、それぞれの宗教の部分を選び抜き、それらと一緒にすることができるかどうか挑戦してみる。そうすると、それを選び抜いた者が多くの信仰の部分を含む、スーパー信仰を作り上げることが出来る。私はこれを三つ目のアプローチ「シチュー鍋」方法と呼ぶ。以前の世代は、冷蔵庫を掃除するために、残っているものをすべて使い切ろうとする。これらのシチューは、往々にして消化するのに大変だった。「シチュー鍋」の多様な宗教に対するアプローチ方法の問題は、多くあった。すべての宗教は同じことを言いはしない。それぞれの宗教にはそれぞれの独自性がある。すべての宗教は、それぞれの土壌で成長する。東の宗教(ヒンズー教、仏教、神道など)は、西の宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)とは違う世界観を持っている。折衷(選び抜き)宗教の結果は、通常、誰も喜ばせない。それはまるで、誰かが象について言った言葉と似ている。「委員会によって、まとめられたもののように見えます。」(←アメリカンジョーク??この象の例えの意味がよくわからん。。)

私がお勧めする四つ目の態度は、「傾聴する愛」と呼ばれるものである。愛をもって聞くという態度は、言葉の通りを意味する。それは多宗教に耳を傾ける。保守的な態度でなく、他の人の観点を理解しようと努める。これは、自分自身の信仰を知っていなければならないし、他者の信仰についても知っていなければならないことを意味する。傾聴する愛は、双方の視点の間で丁寧な対話が要求される。それから、キリスト者は、神との対話から自信を持って離れなければならない。私は、傾聴する態度に対してすべての異論を聞いてきた。このような異論である。「しかし、私は知的議論には勝たなければならない。そうしなければ、神が悪く見えてしまうでしょう。」とか、「自分が自分の芝生に居ない時(※自分はこれだ!と信じるものがなければ、、、みたいなことだと思う)は、宗教的議論によって脅威を感じる。」「わたしは他の信仰についてなんて何一つわからない」と

かう異論である。これらの議論に名をつけることは、これらに答えることである。神の栄誉は、私たちの議論によって縛り上げられることはない。もし、あなた自身の信仰が安定しているならば、あなたを脅威にさらすような「芝」はどこにもありはしない。他者から学び、他者について学ぶことで、あなたは、前向きな信仰の証しをすることができる。

多元論の解決 (Resolving Pluralism)

メディアや、公共交通機関、そして多元論によって世界が身近に引き寄せられるのは、「あなたの顔に」(In-your-face)という事実である。多元主義は、単純な答え(単一性)を満たすまでは縮小されない複数の視点の現実である。私は、21世紀、多元論は、宗教共同体の相互対話における最大の問題を引き起こすと予測する。モスク、アシュラム、仏教の寺やバハイ教(※19世紀半ばにイランでバハー・ウッラーが創始した一神教のことらしいよ。)などは、アメリカのいたるところに突如出現している。誰もが予測できるように、増加傾向にある。どのようにすれば多元論は解決でき、一つの単純な解決法をもたらすことが出来るだろうか。私は、これが解決されるとは決して思わない。さらに、知的な解決策が、問題の中心を解決することはほとんどない。

私は、この挑戦に対して愚かさを証明するような解決を何一つもたない。そしてそれをなしうるような人間を知らない。いくつかの役立つヒントはある。すべての宗教は三つの部分を有する。「教義」、「礼拝習慣」、「倫理」である。多宗教への最強なかけはしを作れるとしたら、倫理部分においてである。ほとんどの宗教は、命を尊重したいと欲しており、世界を保ちたいと欲している。私たちはこれらの賛同できるポイントから始めなければならない。私たちは戦争によって命を無駄にするような無意味さや自然の資源を卑しく使うことを根絶することに協力しなければならない。この友好的でエコに関する協力は、すべて協力したものにキリスト教的救いを十分にもたらすものではない。しかし、これらの協働は間違いなく人道支援となり、この星を救う手伝いになる。これらの態度と行動において、まさしく神は賛美されることだろう。どの宗教も、最善な証明は、知的な議論の中には見出されず、倫理的な行為の中に見出される。クリスチャンは神は正義と愛の神であると信じている。クリスチャンのために、これらの信仰を強固にする最善の方法は、愛し、義なる存在になることである。私たちは確かに、自分の実によって知らなければならない。これ以上に、デモンストレーションとなり、私たちの信仰の証明を与える最善の方法はない。しかし、疑問は残る。「クリスチャンではない人々に何が起こるのか？そして、キリストを知らない人々にも同様に何が起こるのか？」

古き二重の答えは、いまだうまくやっていくスタンダードな方法なのだ。すべての人々は彼らの持つ光によって裁かれる。それはこの世と人類を裁く神である。この暫定的な答えは、伝道と使命への私たちの責任に勢いを与える。私が見出した答えは、どこであれ、真理のあるところ、善意のあるところ、美しさのあるところは、直接的であれ、間接的であれ、必ず神から来ているということである。クリスチャンは、キリストにのめり込んでそこだけに集中しすぎているように見える。キリストは、この方を通して明確に神を見ることのできるただ一人の方である。これがキリスト教の性質で

あり、私が共有しているものである。はじめに神、終わりに神、神はカーテンを開けて誰が神であるかを表され、私たちが一体何者であるかを表された。この啓示のドラマは、面白いショーである。

あとがき

古きバプテストは、神に関するステートメントが信仰告白を始めた。また、彼らは神がどのように神ご自身をあらわされたかについて語った。それはひょっとするとなすべき知恵あることだっただろう。しかし、あなたが組織神学を設定するとき、神がどのように私たちのところに来られたのかということについてから始めることが喜ばしいことのように見える。私は 42 年間、バプテストの牧師たちを教えてきた。この章は、キリスト教からの眺めと他の信仰共同体からの眺めの両方から、多くの神学の流れによって影響を及ぼしてきた。この本の目的に沿って、私は専門的な脚注や、広範囲にわたる学術的な引用を断念した。私はバプテストによる神学的著作の選ばれた書誌を添付した。多くの私が使っているソースは、私のバプテストのふるいにかけているものを置いている。読者はこの蒸留に歓迎する。これは読者が彼らの信仰を理解し、バプテストのルーツを喜ぶ助けとなるという、私の熱心な願いが伴う。